

# 宮城県のニホンザル

第 18 号

金華山のサル・食物リスト

平成 16 年 10 月

宮城のサル調査会

# 金華山のサル・食物リスト

## 目 次

金華山のサルの食物リスト・改訂版	…………… 1
伊沢紘生	
金華山のサル・非追随オス4頭目の追跡記録	…………… 17
宇野壮春	
宮城県における野生ニホンザルの群れ分布	
—2002～2003年度委託調査・報告書の概要—	…………… 21
伊沢紘生	

## 金華山のサルの食物リスト・改訂版

宮城教育大学 伊沢紘生

宮城教育大学を中心とした筆者ら研究グループは、金華山に生息する野生ニホンザルを対象に、1982年から生態学的調査を継続してきた。そして1993年に、当時までに観察された植物性食物のリストを作成した(伊沢・小室博義著「宮城県のニホンザル」第6号)。

しかし、A群とB<sub>1</sub>群をはじめサルのハビチュエーションが著しく進んで、ごく間近での観察が可能になったこと、島に長期滞在して詳細な調査を行う他大学の研究者が増えたことが主な理由で、その後、植物性食物のうちのとくに草本類と、動物性食物のうち昆虫類を中心とした無脊椎動物が何種類も新たにリストアップされるようになった。

そこで、20年をすでに経過した現段階で、10年前の今回は取り上げられなかった動物性食物を含め、食物リストの改訂版を作成することにした。

改訂版作成にあたっては、A群でニホンザルの行動圏利用を研究中の辻大和氏(東京大学大学院農学生命科学研究科・博士課程)、A群でサルの社会行動を研究中の杉浦秀樹氏(京都大学霊長類研究所・助手)、B<sub>1</sub>群でサルの採食生態を研究中の風張喜子氏(北海道大学農学研究科・修士課程)の3氏から、多くの資料の提供と作成したリストのチェックを受けた。とくに草本類リストは辻氏の研究で充実したが、指導教官であり金華山の植物に精通している高槻成紀氏(東京大学総合研究博物館・助教授)の存在が大きい。筆者を含む宮城のサル調査会や宮城教育大学フィールドワーク合同研究室の調査員が昆虫類を中心としたサルの動物性食物に注意を払うようになったのは昆虫分類学を専門とする溝田浩二氏(宮城教育大学環境教育実践研究センター・助手)が身近にいてくれたおかげである。また、金華山でのサル調査で日々の観察記録用紙に欠かさず食物を記載してくれた藤田志歩氏(日本学術振興会特別研究員)、杉浦陽子氏(宮城のサル調査会)、坂田瑞恵氏(公園緑地管理財団)はじめ、じつに多くの調査員の協力なしにこの作業は不可能だった。謹んで感謝の意を表したい。

木本類

種類	本数	利用部位	観察時期 (月)											備考		
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3	
アオダモ		樹皮	○									△	○	◎	○	③
		芽	○									○	○	◎	○	
		葉	△	○	○		△									
		花		○	△											
		実							△	○						
アオハダ	少	樹皮	○									○	◎	◎	◎	①
		芽										○	◎	◎	○	
		葉					△									
		実					△		△	△	○	△				
アカガシ	★	実						○	◎	◎	○					②
アキグミ	▲	実					△									③
アケビ	▲	実					○									③
アワブキ	少	実						△	△	△						③?
イワガラミ		樹皮	○					△	△	△	○	○	◎	○		③
		芽	△							△	○	○	◎	○		
		葉	△	○	○						○					
		花		△												
		実													○	
ウスユキハナリノキ		葉		△	△	△										③
		花		○	○											
		実					△		△	△						
ウメ	★	芽			△											①
		葉			○											
		実			△	△										
ウラジロノキ		葉	○													①
		実						△	○	○	△	△				

種類	本数	利用部位	観察時期 (月)											備考			
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3		
エゴノキ		実					△		△							③	
エノキ	★	葉		△	○	△					△						
		実					○	○								①	
エビヅル類 〔キクバエビヅル サンカヅル〕	少	樹皮				△	△	○									
		葉			○	○	○	○									
		実							○							③?	
オウラジロキ	少	芽										△					
		実						△	○	○	△					①	
オニグルミ		芽		△													
		葉			○												
		実		△	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	②	
		実生		○													
カエデ類 〔オモシ ヤマモシ クオカエデ イヤカエデ ウリハタカエデ ハウチワカエデ〕		樹皮											△		△		
		芽											○	○	○		
		葉	◎	◎	△		△										
		花	△	◎													
		実		△			△		△	△	△	○	△			②	
カキノキ	★	実					△	△	◎	○					①		
ガマズミ		樹皮													△		
		芽	○										△	△	○		
		葉	◎	◎	○	△	○	○									
		花		○	○												
		実			△		△	○	◎	◎	◎	◎	○	△	△	①	
カマツカ		樹皮								△							
		芽	△														
		葉	○	○	○	○											
		花		◎	◎	○											
		実							△	○	○	○		△		①	

種類	本数	利用 部位	観察時期 (月)											備考	
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3
カヤ		実 実生				△	○	◎	◎	◎	○	○	△	△	②
キツタ		樹皮 芽 葉	○ △				○	○					○	○	○
クサギ	少	芽 葉					○				○	△			
クヌギ	★	実						△	○	○	○	△			②
クマノミズキ		樹皮 芽 葉 花 実	○ △			△	△	△	△	△	△	△	○	○	○
クマヤナギ		樹皮 芽 葉 実		△			△	△	△	△		△	△	△	①
クリ		樹皮 芽 葉 実	△ ○					△				○	○	◎	◎
ケヤキ		樹皮 芽 葉 花 実 実生	○ ○ ○ ○	○ △ ◎ ○		◎ ○	○ △	△ △					△ ○	○ △	△ △ ○

種類	本数	利用部位	観察時期 (月)											備考				
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3			
コゴメウツギ		葉	△	△	△	○	△											
コナラ		葉 実 実生								○	◎	◎	○	△			△	②
コブシ	×	葉		△	◎	◎	◎	△										
サイカチ	▲	葉						○										
カワ類(植栽) 〔ソメイヨシノ シダレザクラ〕	少	樹皮 芽 葉 花 実 樹脂						△					△	△	△		○	③
サルナシ	▲	樹皮 葉 実	△ ○													△	△	①
サワフタギ	少	樹皮 芽 葉 花											○	○	○	○	○	
サンショウ		樹皮 芽 葉 花 実	○ ○ ○	○ △ ○				○ △ △	△ △ ○		○ △ ◎	○ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎		△ △		③
シキミ		花															△	

種類	本数	利用部位	観察時期 (月)											備考		
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3	
シデ類 〔アカシデ〕 〔イヌシデ〕		樹皮							△			△	○		○	
		芽	△									△	△	△	○	
		葉	○	△	△				△							
		実				△		○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
スイカズラ		芽	△											△	△	
		葉	△		○	△	△		△	△	△	△	△	△	○	
		実								△	○		△			①
スギ		実									△	△				②
タラノキ		樹皮		△	△	○	○		△		△	△		△		
		芽										△				
		葉			△											
		花				△										
		樹液		△	△	○	○	○	○						△	
チシマザサ		葉			△	△										
チドリノキ		葉	△	△						△						
		実								△						②
ツバネツギ	▲	花		△												
ツルアジサイ		樹皮	○											○	○	
		芽	○											○	○	
		葉	○													
ツルメトキ		樹皮		△			△	△								
		芽		○												
		葉	△	△	△	△	△									
		実										△				③
ツルマサキ	少	葉		△							△	△				
テイカズラ		樹皮	△													
		葉	△								△	△	○	○		



種類	本数	利用部位	観察時期 (月)											備考			
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3		
トベラ		実									△	△				①	
ニガイチゴ		葉	△	△	○	○	△	△	△	△	△						①
		花 実	○	△		○											
ノイバラ		樹皮		△	△											△	①
		芽	○	△								△				○	
		葉	△	△	△	△	△			△	△	△	△	△		○	
		実							△	○	◎	○	△			○	
ハリエンジュ	★	葉		○	○												
フジ	▲	樹皮										△	△				
		花		◎	◎												
ブナ		樹皮	△										△	△	△		②
		芽											△	△	△		
		葉	△	△		△		△									
		花	◎	◎												◎	
		実	○		△	△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
		実生			△												
ホオノキ		芽	△	△								△	△	△	△		③
		葉		○	◎	◎	◎	○									
		実				△	○	○	○	△	△	△			△		
マツ類 〔アカマツ クロマツ〕		芽							△		△	△		△		②	
		葉 実	△		○	△		△	△	○	○	○	◎	◎			
マツブサ		樹皮		△	△												①
		葉		△													
		実						○	○								

種類	本数	利用部位	観察時期 (月)											備考			
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3		
ミズナラ		葉 実						○	◎	◎	○						②
ミツバアケビ	少	葉	△	△		△	△			△						△	
ムラサキシキブ		樹皮 芽 葉 花 実					△						△	△	△		③
メギ		樹皮 芽 葉 花 実	◎	○								△	○	○	○	△	③
モミ		樹皮 実										△	△	△			②
モミジイチゴ		葉 花 実	△	△	△		△	△	△								①
ヤドリギ		芽 実									○	◎	◎	○	○		①
ヤブツバキ	★	実						△									②
ヤマウイソカゲラ	少	葉 花 実	○	△													①
ヤマウコギ	▲	実				○	△										③

種類	本数	利用部位	観察時期 (月)											備考			
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3		
ヤマザクラ		樹皮					△								○	△	①
		芽													○	△	
		葉		△													
		花	○	◎													
		実		○	◎	◎											
		樹液						○									
ヤマツツジ		樹皮	○													△	③
		芽														△	
		葉		○													
		花		△													
		実	△														
ヤマナシ	少	葉			○	△											①
		実			○				○	◎	○						
ヤマハンノキ		葉		△	△												②
		実														△	
ヤマブドウ	▲	実							△								?
ヤマボウシ		樹皮	△														③
		芽	△									△	△	○	△		
		葉	○					△	△								
		花								△							
		実				△	◎	◎	○	○	△						
リョウブ		花				△											

草本類

種類	利用部位	観察時期 (月)											備考				
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3			
イワニガナ	地上部									△	△						
オウシクガサ	地上部	△	△													△	

種類	利用 部位	観察時期 (月)											備考			
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3		
オニタビラコ	地上部		○				○									
カタバミ	地上部	△	△	△						△	△					
	花				△											
カモガヤ	地上部														△	
カヤツリグサ	地上部	△	△													
カラスビシャク	地上部						△									
キンカアザミ	地上部														△	
	花					△										
サルトリイバラ	実					△	△		△	△						①
ジシバリ	地上部			△							△				△	
シダレスメカヤ	地上部														△	
シバ	地上部		○	○	△	○	○	○			○	○	△	△		
	地下部												△	○		
	花*		○	○												
	実			△	○	○										②
シロツメクサ	地上部				△	○	○									
ススキ	地上部						△									
スズメカタビラ	地上部		△													
セッコク	地上部												△			
セントウソウ	地上部		○		○		○	○	○						○	
ダキバヒメアザミ	花														△	
タチツボスミレ	地上部	△	○	△			△									
チヂミザサ	地上部	◎	○			○	○	○	○	○	○	◎	◎			
	地下部	◎	○	△							○	○	◎	◎		
テンナンショウ類 〔ウラシマソウ・マムシグサ〕	実								△	△						①
ニガナ	地上部	△	△	△									○	○		
ハコベ	地上部	△	○										△	△		

種類	利用 部位	観察時期（月）											備考		
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3	
ハダカホオズキ	実							○	△						①
ハマギク	地上部													△	
ハンゴンソウ	地上部		△		△										
ヘクソカズラ	地上部	△	△												
ヘビイチゴ	実			△											①
ホオズキ	実							△	△						③
ボタンヅル	葉									△					
	実	△							△	○	△		△		③
ミツバツチグリ	花			△											
ヤイトバナ					△										
ヤマカモジグサ	地上部			○											
ヤマヌカボ	地上部		△	△											
	地下部									○					
ヤマノイモ	葉			△	△	△									
ユリワサビ	葉								△						
ラセイタソウ	実											△	△	△	②
レモンエゴマ	地上部								△						
	実							○	◎	◎	◎	◎	○	△	②

\*シバの花とは花穂のことである

### 地衣類・キノコ類

種類	観察時期（月）											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
地衣類												
ウメノキゴケ	△										△	△
キノコ類												
アカモミタケ							△					
アラゲカワラタケ							△				△	

種類	観察時期 (月)												
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
アラゲキクラゲ												△	△
エノキタケ									△				
カラカサタケ			△	△									
カワラタケ					○	△	△					△	△
カワリハツ			△	△			△						
キクラゲ						△	△						
キハツダケ							△						
キヒラタケ			△										
クリタケ			△					○					
クロハツ				○									
コガネタケ								△	△				
サガリハリタケ								△					
サクラシメジ								△					
シイタケ								○					
シロキクラゲ							△						
シロハツ			○	○	○								
シロハツモドキ			△										
シロフクロタケ							△						
スギヒラタケ			○	○									
タマゴタケ			○	○		○							
チシオハツ			△										
ツキヨタケ							△				△		
ドクベニタケ			○	○	○	○	○						
トンビマイタケ					△								
ナメコ							○	○					
ナラタケ							○	○	○	○			
ナラタケモドキ								○	○				

種類	観察時期 (月)											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
ニンギョウタケ							△					
ヌメリスギタケ						○	○	○				
ヌメリツバタケ				△								
ハカワラタケ									○			
ハタケシメジ				△								
ハツタケ					○							
ハナウロコタケ											△	
ハナビラニカワタケ										△		
ハリタケ	○											
ヒラタケ			△	○		○	○					
ブナハリタケ			○							○		
マスタケ						△						
マツオオジ		○	○									
ムラサキシメジ									○			
ワサビタケ										△		

### 海藻類

種類	観察時期 (月)											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
アマノリ	△		△	○	○						△	○
イワノリ			○									○
ウシケノリ			△									
カヤモノリ					△							
コンブ		○	○	△								△
スジメ	△			○	○	△					○	◎
チガイソ	△	○	◎	◎	◎	○					△	△
ヒジキ	△		○	◎	◎	○					○	○
ヒトエグサ					△						△	△

種類	観察時期 (月)												
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
フクロフノリ				○	○							△	○
ホンダワラ	○												△
マツモ	◎	△		○	○							○	◎
ワカメ	◎	△		△	○						△	◎	◎

動物

種類	観察時期 (月)												備考	
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
トンボ目 アキアカネ								○						
トンボ類				△										1種
バッタ目 バッタ類*			○	○	○	△	△							6種以上
コオロギ類*				○	○	△	○							2種
カマキリ目 卵		○						△				○		1種?
カメシ目 エゾゼミ				○	△									
ニイニイゼミ			○	○										
ヒグラシ				○	△									
アブラムシ類		○	○											1種?
コチュウ目 クワガタ類							△							1種
ゾウムシ類				△										1種
ハエ目 アブ類(大)					△	△								1種
アブ類(小)					△									1種
ハエ類			△											1種
チョウ目 ガ類		○	△	△										複数種
アゲハ類の幼虫				△										1種
メイガ類の幼虫 (ハゴソウの茎の中)				△	○		○	○	○	○				1種
メイガ類の幼虫 (キカザミの茎の中)					○	○	○					△		1種



種類	観察時期 (月)												備考	
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
ガ類のサナギ													○	1種
ハチ目 アリ類		△	△		△									1種
虫えい		△		○	△			○						数種
クモ類				○	○	△	○							数種
ワラジムシ		△	△		△									
ナメクジ類			○	△	△									1種?
カタツムリ類			△	△		△	△							複数種
サワガニ			△											
貝類 カサガイ類	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3~4種
フジツボ類			○											1種
ニシキウスガイ類		△												1種
タゴガエル			△			△	△							

\*バツタ類はオグバツタ、ショウヨウバツタ、クサキリ、フキバツタ、イコモトキ、ヒロバネバツタほか。  
コオロギ類はエンマコオロギ、ハラカメコオロギである。

註1. サルが食物として利用している程度を、次の三段階に区分した。

- ◎…群れがそれを求めて移動し、多数が同時に採食した食物。すなわち、その季節の主要食物(main food)になったことのあるもの。約10km<sup>2</sup>の小さい島だが、群れの行動圏ごとに植生がかなり異なり、どれか1群で、ある年に観察されたというものも含まれる。
- …サルが◎印と△印以外の利用の仕方をしたすべての食物。
- △…1~2頭がつまみ食いするのが観察された食物。天候条件で年により夏から秋に再び新葉が出、秋から初冬に開花する植物があり、サルはそれらもつまみ食いする。

註2. 同定できていない植物はすべて省き、確かな観察記録のない時期については空欄にした。

註3. 木本類については種名の右に「本数」欄をもうけ、島でとくに少ないものについて、少ない順に以下の区分をした。

×…かつてあったが消滅したもの。

★…1～数本しかないもの。

▲…本数を調べていないがきわめて少ないもの。

少…本数を調べていないが少ないもの。

註4. 採食部位について、木本類は以下の区分をした。

樹皮…木部より外側の部分。枝先やつるの先端部の茎を木部を含めて食べた場合も含む。

芽 …休眠芽(冬芽)と新しく出た芽(新芽)の両方を含む。春の大きくふくらんだ花芽は含まない。

葉 …新葉と成熟葉の両方を含む。

花 …花卉、がく、総ほうの全体または部分。蕾や木本類のふくらんだ花芽も含む。

実 …果肉、種子の全体またはどちらかで、備考欄に以下の区別を付記した。

①果肉の部分(果皮を含む)を主に食べる。そのとき種子は丸呑みされるか吐き出される。

②種子の中味(胚乳の部分)を殻を歯で噛み割って食べる。

③両方を食べる。

実生…地上部だけの場合と地下部を併せた場合の両方を含む。

樹脂・樹液…固形化し幹や枝に付着している状態のものを樹脂、液体状でサルがなめ取って食べたものを樹液と区別した。

註5. 草本類は花(花穂を含む)と実以外の葉や茎や根などは地上部、地下部とだけ区別した。

註6. 木本類と草本類の区別は『日本の野生植物』(平凡社)に準じた。

註7. 動物は何を食べたか観察や標本の採集が困難な場合もあって種まで同定できないものも多く、動物以外のリストとはバランスを欠くが、それらは類として記載した。備考欄には類ごとに確認された種数を記した。また昆虫等は成長によって生活形を異にするので、成虫以外はさなぎ、幼虫、卵の区別を付した。

# 金華山のサル・非追隨オス 4 頭目の追跡記録

宮城教育大学 宇野壮春

## 1. はじめに

群れを出たオスザルのその後を追跡調査することは非常に困難である。ただ、島というサルにとっての閉鎖的環境では、どこかで誰かが出会うチャンスがある。とくに誰の目にも明らかな身体的にきわだった特徴をもった個体だと、目撃情報が集まりやすい。これまでに、そのような3頭のオス「コベラ」、「エーシー」、「ナギ」についてまとめられてきた(伊沢, 2002, 2004、熊野, 2004)。

今回、整理する4頭目のオスザルは、最近(2002~2004年)になって神社から山小屋周辺で頻繁に目撃されるようになった「ジェイ」である。

## 2. 「ジェイ」との出会いと特徴

「ジェイ」に筆者が初めて出会ったのは2002年9月23日、調査小屋から神社に向かう遊歩道の、黒沢が交叉する付近だった。交尾期で、B<sub>1</sub>群のメスとコンソート・ペアを作っている群れ外オスを追尾している時、肩を怒らせながらゆっくりと「ジェイ」が現れた。群れ外オスは、ペアのメスを威嚇して木の上に追い上げ、尻込みしたように「ジェイ」を凝視する。

「ジェイ」はこの時点で15歳前後と思われる、体格の立派なサルだった。「ジェイ」の顔は、上唇の真ん中より少し左側から鼻下にかけてバツサリと切れて無く、そのため口を閉じた状態でも前歯が上下5本見える。また、右目の外脇に縦に並んで白い大きな斑点が3つある(図1)。

## 3. 「ジェイ」の記録

表1に「ジェイ」の目撃情報をまとめた。最も古いのが2002年の春先で、それ以前に「ジェイ」と思われるオスの記録は今のところ得られていない。出自はわからないが、非常に人馴れしていることから判断すると(観察者は2~3mまで接近できる)、A群かB<sub>1</sub>群の可能性が高い。

また、目撃情報 15 例のうち 13 例は単独であり、この点では、群れのサルとも群れ外オスとも積極的に関わろうとしない「ナギ」(伊沢, 2004、熊野, 2004)に似ている。ただ筆者の観察した 2002 年 9 月 24 日には、B<sub>1</sub>群のメスとの交尾を観察している。

図 2 に「ジェイ」の目撃地点と移動ルートを示した。図からは 2002 年の交尾期には B<sub>1</sub>群の遊動域内で頻繁に目撃され、2003 年に入ってから A 群の遊動域内、特に神社周辺で多く目撃されるようになった。しかし、この 2 年半の間で、「ジェイ」が A 群や B<sub>1</sub>群に一時的にせよ追従したり群れに入ったという観察はない(杉浦秀樹, 辻大和, 風張喜子氏よりの私信)。筆者は B<sub>1</sub>群の遊動域内を主に利用するオス・グループを 2002 年から調査しているが(宇野, 2004)、「ジェイ」がオス・グループのサルたちと親和的な交渉をもったことは一度もない。

表 1. 「ジェイ」の記録

No.	観察日	一緒にいたサル	観察者
1	2002. 3. 24	単独で	金森朝子
2	6. 6	単独で	大西信正
3	6. 8	単独で	伊沢紘生・藤田裕子
4	9. 23	単独で(B <sub>1</sub> 群周辺)	宇野壮春
5	9. 24	単独で(B <sub>1</sub> 群周辺)	宇野壮春
6	9. 25	単独で	中村友紀
7	10. 10	単独で(B <sub>1</sub> 群周辺)	辻大和
8	10. 14	A♂と 2 頭で(B <sub>1</sub> 群周辺)	宇野壮春
9	10. 15	単独で(B <sub>1</sub> 群周辺)	宇野壮春
10	2003. 6. 6	単独で	大西信正
11	6. 17	単独で	大西信正
12	9. 4	F A♂と 2 頭で	小野雄祐
13	9. 15	単独で(A群の周辺)	藤田志歩
14	2004. 1. 30	単独で	熊野江里
15	5. 29	単独で	熊野江里



図 1. 「ジェイ」の顔写真(左:正面、右:横顔)

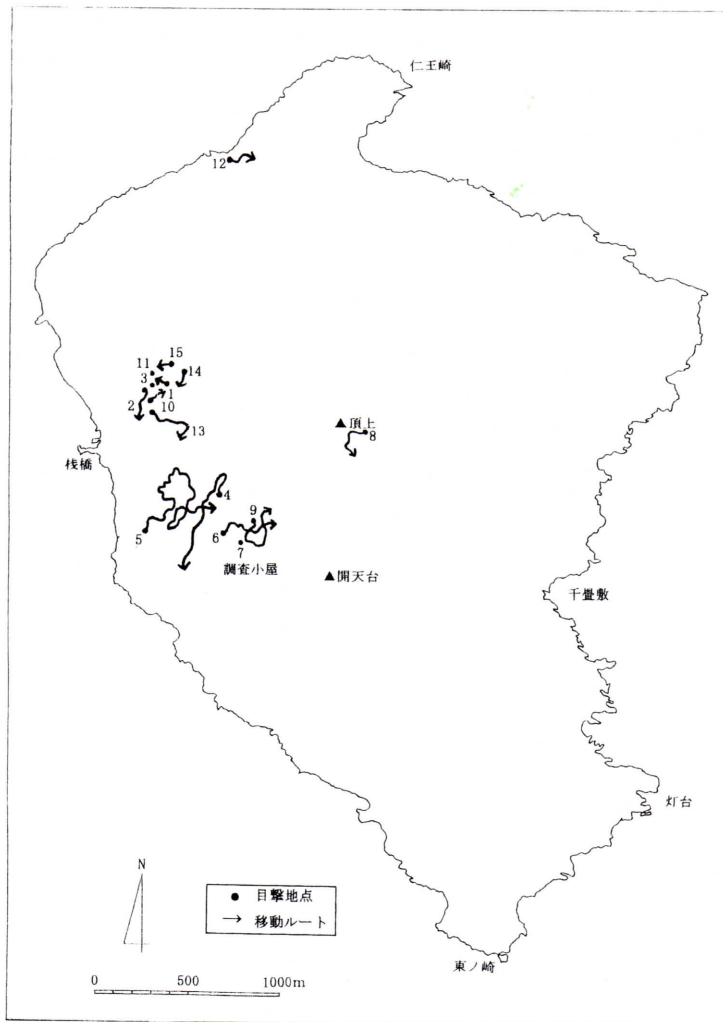


図 2. 「ジェイ」の観察地点(図中のナンバーは表 1 のナンバーに対応)

## 謝辞

今回まとめた記録は多くの調査員によるもので、筆者はそれを整理する労をとったに過ぎない。宮城教育大学・伊沢紘生教授には終始ご指導頂きました。また、A群とB<sub>1</sub>群に関して貴重な情報を頂きました杉浦秀樹博士(京都大学霊長類研究所助手)、辻大和氏(東京大学農学部大学院)、風張喜子氏(北海道大学農学部大学院)、および金華山で調査をされた多くの方々に心から感謝を申し上げます。

## 引用文献

- 伊沢紘生(2002) 金華山で2頭のオスザルを追うー「コベラ」と「エーシー」の記録ー。「宮城県のニホンザル」vol. 12, p. 20-29
- 伊沢紘生(2004) 金華山・3頭のオスザルの記録。「宮城県のニホンザル」vol. 16, p. 14-20
- 宇野壮春(2004) 金華山のサル・オスグループの存在様式。「宮城県のニホンザル」vol. 16, p. 6-13
- 熊野江里(2004) 金華山でハナレザルの行動を追う。「宮城県のニホンザル」vol. 16, p. 21-28

# 宮城県における野生ニホンザルの群れ分布

## 2002～2003 年度委託調査・報告書の概要

宮城教育大学 伊沢紘生

### 委託調査の報告書について

宮城のサル調査会は2002年度と2003年度に宮城県環境生活部自然保護課から、宮城県ニホンザル保護管理計画策定に向けた県内全域における野生ニホンザルの生息状況に関する調査を委託された。

本調査会はこれまで20年にわたって独自に調査してきた成果と経験をもとに、両年度とも、県内にいくつ群れがいて、群れごとの行動圏はどの地域をカバーしているか、群れ間の関係はどうかについて調査を行った。

そのうち2002年度はとくに、これまで情報が少なく現地調査も十分にはできていなかった県北・加美町の西部山域(旧小野田町と旧宮崎町)に生息する群れの実態調査と、1997～1998年度に仙台市から本調査会が委託を受けて調査した仙台市及び川崎町西部山域に生息する9群のその後の動向調査に主眼を置いた。また、県内全域を対象にサルの農作物被害の実態について詳細な聞き取り調査を行った。

続く2003年度は、県南・七ヶ宿町で古くから(1950年代)農作物に被害を与え毎年数10頭も駆除されているサルについて、群れが実際にはいくついて、どの群れがどの地区で被害を起しているかの調査、および白石市に生息する群れの数と行動圏に関する聞き取り調査、丸森町南部の福島県との県境地域に出没する群れについての現地調査と聞き取り調査、県全域での群れ外オス(ハナレザル)の出没状況に関する諸資料の分析に重点を置いた。同時に、ニホンザルの保護管理に向け、群れの奥山への「追い上げ」実験を仙台市西部の定義地区で実施した。

それら年度ごとの委託調査の結果については、本調査会はすでに『宮城県ニホンザル生息状況調査・完了報告書』として公表しているが、おおよその内容を推察してもらえるように、両年度の報告書の目次を次ページと次々ページに示した。

## 2002 年度報告書の目次

第1部 宮城県におけるニホンザルの生息状況	1
1. 宮城県におけるサルの群れの歴史	
2. 用語の定義	
3. 宮崎・小野田ポピュレーション	
4. 仙台・川崎ポピュレーション	
5. セツ宿・白石ポピュレーション	
6. 松山・鹿島台ポピュレーション	
7. 金華山ポピュレーション	
8. 宮城県における現時点での群れの生息状況	
引用文献	
第2部 宮城県におけるニホンザルの農作物被害状況	41
1. サルの農作物被害に対する本調査会による調査	
2. 自治体へのアンケート調査	
3. 宮崎町での聞き取り調査	
4. 小野田町での聞き取り調査	
5. 川崎町での聞き取り調査	
6. 白石市での聞き取り調査とサル駆除の現状	
7. 仙台市に生息するサルについて	
8. その他の地域に生息するサルについて	
引用文献	
第3部 サルとどうつき合うか	59
1. 宮城県のサル・ポピュレーションと群れの個体と	
2. 群れごとの置かれている現状	
3. 行政によるこれまでの対処の仕方	
4. どうつき合うか	
第4部 資料および写真資料	67
資料1. サルの生息状況と農作物被害状況に関するアンケート調査のまとめ	
資料2. 群れ外オスに関するアンケート調査のまとめ	
資料3. サルの生息状況に関する聞き取り調査のまとめ	
資料4. サルに対する住民の意識調査	
写真資料1～13	



## 2003 年度報告書の目次

第一部	宮城県の野生ニホンザル・群れの生息状況	・・・1
1	加美ポピュレーション	
2	仙台・川崎ポピュレーション	
3	七ヶ宿ポピュレーション	
4	白石ポピュレーション	
5	金華山ポピュレーション	
6	松山・鹿島台ポピュレーション	
7	丸森町南部における群れの生息状況	
8	県全域の群れ分布とその特徴	
第二部	宮城県の野生ニホンザル・群れ外オスの生息状況	・・・39
1	宮城県における群れ外オスの出没状況とその特性	
2	群れ外オス(非追随オス)の移動距離	
3	群れの遊動域拡大と群れ外オスとの関係	
4	追随オス, 非追随オスと群れとの関係	
第三部	サルとどうつき合うか	・・・55
1	宮城県のサル・ポピュレーションと群れと群れ外オス	
2	保護管理のための「サルの評価」	
3	行政や関係機関等による従来への対処法	
4	サルの追い上げと追い払い	
5	サルとのつき合い方の基本	
6	群れを追い上げる試み	
7	群れ外オスとのつき合い方	
8	“どうしようもない群れ” とのつき合い方	
9	銃器によるサルの駆除について	
第四部	資料	・・・73
資料1	サルの群れの評価・レベル判定基準について	
資料2	従来の農作物被害防止対策・利点と欠点	
資料3	ニホンザルの駆除頭数の推移	
資料4	宮城県における野生ニホンザルの有害捕獲頭数の推移	
資料5	宮城県のサルによる農作物被害額の推移	
資料6	宮城県における狩猟免許交付者数の推移	
資料7	写真	

## 宮城県における群れ分布

これまで県内の群れ分布は南奥羽・飯豊南個体群、原町個体群、金華山個体群の、三つの地域個体群にわけて把握されてきた。しかし、今回の調査で、県内の群れ分布は、金華山を除く二つの地域個体群それぞれで連続分布しているのではなく、いずれをとっても群れ分布の間に明確な空白地帯があり、そこに群れが生息するようになった歴史も異なることが明らかになった。そして、現在の群れの連続分布ごとに一つの「ポピュレーション」と捉えると、具体的な保護管理計画が立てやすいことも明らかになった。

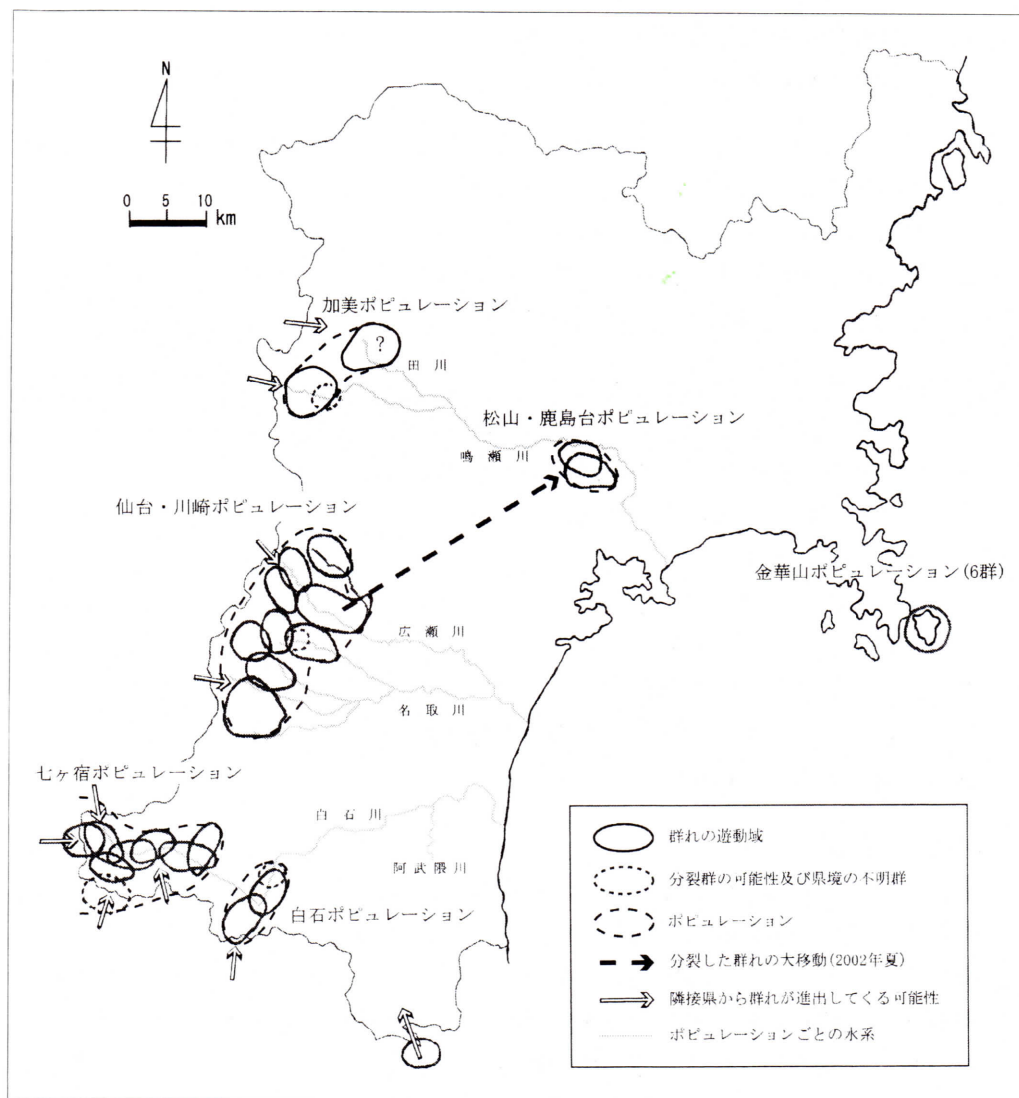


図1. 宮城県の群れ分布

少し説明すると、宮城県には2003年度末の時点で六つのポピュレーションが存在する。すなわち、加美ポピュレーション(1~2群)、仙台・川崎ポピュレーション(10群)、七ヶ宿ポピュレーション(7群)、白石ポピュレーション(2群)、松山・鹿島台ポピュレーション(2群)、金華山ポピュレーション(6群)である。これら六つのポピュレーションで合計28~29群が生息する。そのうち、仙台・川崎ポピュレーションの「秋保大滝の群れ」と松山・鹿島台ポピュレーションの「鳴瀬右岸群」は本調査期間中に分裂して上記の数になっている。さらに加美ポピュレーションの1群と白石ポピュレーションの1群についても早晚分裂する可能性が高い。一方で、加美と仙台・川崎、七ヶ宿の三つのポピュレーションでは山形県側から、七ヶ宿と白石ポピュレーションおよび丸森町南部地域では福島県側から群れが新たに侵入し宮城県側に遊動域を確立する可能性もきわめて高い。

以上のことがらを図1にまとめて示した。また、この図には水系を示してあるが、県内の群れ分布のきわ立った特徴の一つとして、金華山を除くすべてのポピュレーションが水系に依拠している点をあげることができる。

なお、宮城県に生息するニホンザルの総頭数は、2003年度末時点で群れの総頭数が1,500頭前後、群れ外オスが約200頭で、合計約1,700頭と推定される。

### 群れの遊動域拡張

2002年度と2003年度の調査によって、県内に生息するすべての群れで、それぞれの水系ごとに、より下流域へと遊動域を拡張させている実態が明らかになった。その結果、当然のことだが、サルによる農作物被害も年々深刻さを増している。

一例を仙台・川崎ポピュレーションについて見ると図2のようになる。この図で、黒線で囲んだのが2002年度における群れごとの冬期間の遊動域、矢印と点線で示したのが2003年度冬期間に遊動域を拡張した、その方向と地域である。なお、今年(2004年)の夏から秋にかけて、「奥新川A群」と「秋保大滝A群」(「秋保大滝の群れ」は2002年度に「秋保大滝A群」と「秋保大滝B群」に分裂した)は下流域へと際立った遊動域の拡張を行った。その方向と地域を白抜きの矢印で図2に併せ示した。

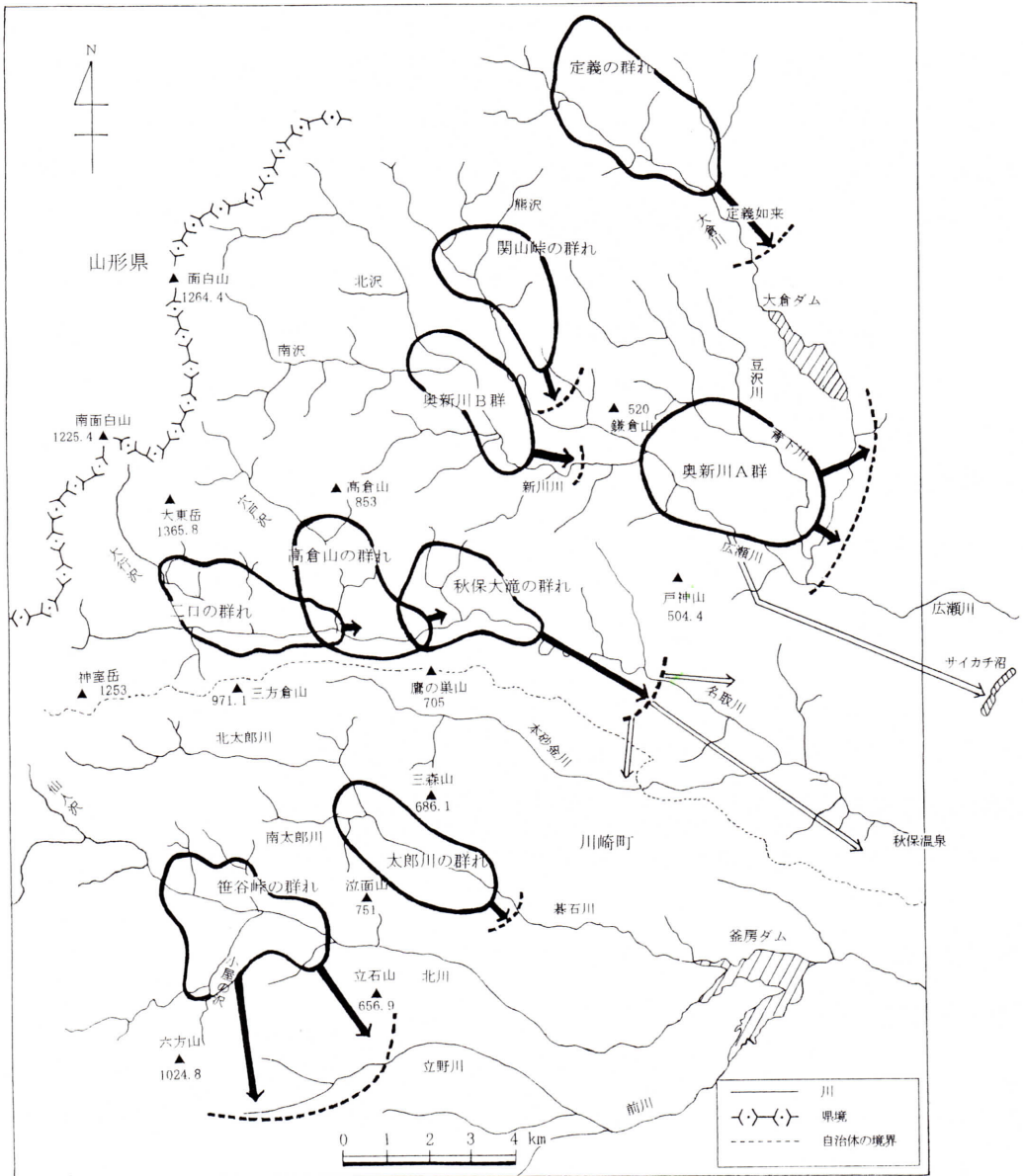


図 2. 仙台・川崎ポピュレーションにおける群れの遊動域拡張

### 保護管理のための群れ評価と「追い上げ」

本調査会は、将来にわたってサルとの良好な関係を築くため、これまで全国各地で長年にわたって実施され、結局のところサルの農作物被害の軽減や被害地の急速な拡大の防止に効果をあげ得なかった農作物への被害程度をもとにした群れ評価と農耕地からの「追い払い」にかわる、新たな提案を行った。

それを簡単に言うと、サルの人や人工物への馴れ具合、農作物への執着の程度、群れの行動圏の後背地の地形や植生、隣接群との関係などを基準に、より良好な関係にある群れから最悪の状態にある群れ(「どうしようもない群れ」)までAからFの6段階に評価し、評価の高い群れから順に奥山へ「追い上げ」を実施していく、という提案である。全国にまだ「追い上げ」に成功した群れの事例は一例もないが、2003年度の仙台・川崎ポピュレーション・「定義の群れ」に対する初めての実験的試みで、具体的な方法を含め、成功への確信を本調査会は持っている。

なお、この委託調査は本年度(2004年度)も継続されている。これから冬期間にかけて、奥羽山脈のより深くに行動圏を構える、新しく設定した群れ評価ではより良い評価の群れから順に、関係者や地元住民の協力を得つつ鋭意「追い上げ」実験を実施する予定にしている。

宮城県のニホンザル 第18号

2004年10月10日発行

発行 宮城のサル調査会

編集 宮城教育大学

フィールドワーク合同研究室

仙台市青葉区荒巻字青葉

TEL/FAX 022-214-3515

表 紙 題 字

前宮城のサル調査会顧問 故加藤陸奥雄博士筆